

教育活動全体の中に位置付けたN I Eの実施2

神戸市立有野北中学校

校長 磯辺 次雄

教諭 佐々木隆光

1. はじめに

有野北中学校は NIE 指定校2年目ということで、昨年度から引き続き、教育活動全体の中に位置付けた NIE の実施を推進した。

まず、昨年度実施開始時の実態として、「①生徒の情報源のメインはテレビやインターネット」「②家庭で新聞を購読していない場合もある」との事実がアンケートの結果から分かり、生徒に対しての目標と学校としての方策を以下のように設定した。

【生徒に対しての目標】

- ①新聞に興味を持たせる。
- ②新聞の有用性を認識させる。

【学校としての方策】

- ①全職員に周知し、学校全体で取り組む。
- ②従来から行われている教育活動の中に N I E を位置付け効果的に実施する。

今回の報告では2年目の取り組みと、実施を終えての結果についてまとめていきたい。

2. 新聞感想文コンクール

生徒、教員の双方に NIE を周知してもらう上で効果的だったのが、「ひょうご新聞感想文コンクール」である。一つ一つの授業や生徒が活動するフロアでの新聞掲示などの日常的な取り組みに合わせて、コンクールのような大きなイベントを活用することで、生徒や教員の NIE に対する関心は飛躍的に高まると

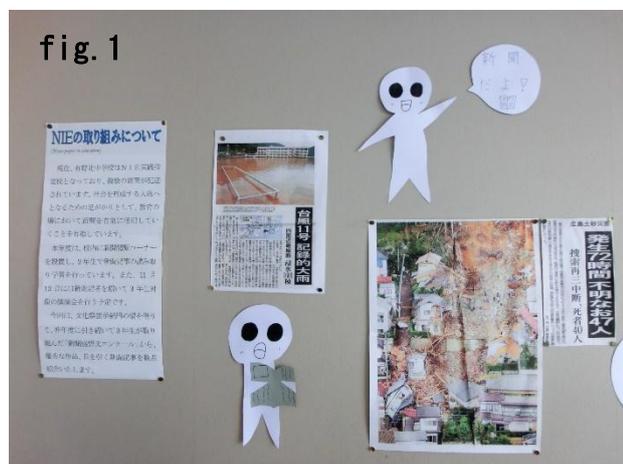
考えられる。

コンクールについては1年越しの取り組みとなる。まず、昨年度の2年生で夏休みの課題として設定した。その時は、まだ学校での新聞購読も始まっていなかったので、「NIE 実践が始まる前に全員に新聞記事を深く読む体験をしてもらうこと」が狙いであった。結果として、生徒が受賞するには至らなかったものの、コンクールから派生して、文化祭での作品展示や、校内優秀作品の全校朝集での表彰などを行い、NIE 活動をアピールする良い機会となった。詳細は、昨年報告書に記している。

そして、本年度はコンクール参加をあえて3年生の課題とした。進路決定目前の夏休みという忙しい時期ではあったが、教師、生徒ともに去年の経験を生かせるという思いがあった。NIE 実践が始まって、進路学習や考査に新聞を取り入れていたので、前回よりも新聞には慣れている状態でもあるはずだった。コンクールへの具体的な取り組みとしては、過去の優秀作品を分析したり、夏休み中に NIE の日を設けたりした。まず、過去の作品を分析することは、ただ単に書き方の見本を見るだけではなく、新聞記事を読む際に、今までの自分にはなかった視点を取り入れる機会となるので有意義であると考えられる。また、NIE の日については、昨年度よりも多くの生徒が登校し、やる気が感じられた。特に、新聞を購読していない家庭にとっては大切な

機会であるし、学校での新聞購読によってストックされていた新聞があるので、題材となる記事を選ぶことにも、それほど苦労はなかった。

結果として、1人の生徒が兵庫県知事賞を受賞し、神戸新聞にも掲載されるなどして、大いに耳目を集めた。コンクールに参加していない学年にとっても、大きな刺激となったに違いない。また、本年度の文化祭展示では、昨年度に引き続き、校内優秀作品を展示したほか、その他の NIE 関係の取り組みについても紹介することができた。(fig.1)



以上のように、NIE 実践の本義のほかに、全体としての関心・意欲を高めていく刺激としての価値がコンクールに付随していた。その意味では、コンクールに限らず、大々的な講演会などでも構わないのであろう。例えば、2年目の新聞購読申込時に、ある代理店から協力の申し出があった。当該中学校を記者が取材し、その後にオリジナルの新聞が届くような取り組みがあるらしいとのことだったが、日程の都合で実現しなかった。このような結果や効果の実感しやすい取り組みを、他にも設定していくことで、短期的な目標を意識し、達成感を感じる機会のある実践となっていくのではないかと考えられる。

3. 全体の中での N I E

1 前期 (2013 年度 9 ~ 3 月)

特に、生徒目標の「①新聞に興味を持たせる」ことと、学校方策の「①全職員に周知し、学校全体で取り組む」ことに重点を置いた。

2 後期 (2014 年度 4 ~ 3 月)

特に、生徒目標の「②新聞の有用性を認識させる」ことと、学校方策の「②従来から行われている教育活動の中に N I E を位置付けて効果的に活用する」ことに重点を置く。

4 月	◎職員会での周知 N I E 新担当者の設定指定校としてのスケジュールと新聞配達計画の周知 協力の要請とアイデアの募集 ◎N I E 新担当者会 2014 年度の取り組み具体案作成
5 月	◎N I E 担当者が各学年で、具体案を説明し、学年単位で実施していく
今 後	◎計画を順次実施していく 3 年生 修学旅行新聞作成 記者派遣事業 2 年生 校外学習新聞作成 朝 N I E 1 年生 新聞閲覧スペース

上記の 1、2 は昨年度の実践報告で紹介した全体の計画である。前期の計画の詳細については割愛している。前期末の 3 月 NIE 旧担当者会を開き、2014 年の取り組みの素案を作成した。4 月からは、校務分掌に NIE を組み込み、各学年 1 人ずつの NIE 担当者が中心となって活動を始めた。これらは、学年の実情に応じて、効果的に NIE を実践していくため

に昨年度計画したことであり、本年度はそれらをおおむね実践できた。

本項では、テーマでもある教育活動全体の中に位置付けた NIE の実施として、二つの取り組みを紹介したい。一つ目は朝 NIE である。この活動は、2 年生が登校後から 1 限目までの時間を利用して実施した。本校で従来から取り組んでいる朝の読書の習慣が定着しており、受験までには猶予のある 2 年生にとって適当な活動であると考えられた。また、学年職員に前任校で朝の学習に新聞を活用した経験のある者がいたので、導入はスムーズであった。

fig. 2

読売ワークシート通信 総合「浜松 ギョーザ日本一」 2018年2月11日(水)

2年 2組(27)名前 [] サイン []

はままつ 浜松 ギョーザ日本一

2014年の「ギョーザ日本一」バトルは、静岡県浜松市が勝利!!
昨年1年間に1世帯あたり、どのくらいギョーザを買ったかを調べた国の調査で、浜松市が2年ぶりに日本一を奪還しました。

「ギョーザの街 日本一が栄えり、また浜松市の人たち」

ギョーザ日本一の座は、1996年から15年連続で静岡県宇都宮市でした。ところが、2011年と12年は浜松市が1位になり、13年は宇都宮市が1位に返り咲きました。浜松市と宇都宮市はアッドヒートを繰り広げています。浜松市と宇都宮市では、旗を挙げて「ギョーザの街」を争う。自分の市を日本一にしようと騒ぎです。ちなみに、14年の1世帯あたりのギョーザ購入額は、浜松市が4363円。2位の宇都宮市とは、わずか174円の差でした。

④あなたの地域で日本一にしたいものはなんですか。その理由も書きましょう。

神鉄やさしい日本一
おれ 神鉄は、遅れようがないから、デラを開けてくれるから。

④あなたの地域で日本一にしたいものはなんですか。その理由も書きましょう。

学校が六甲山が良く見える。理由、晴木の日と窓の外を見ると山に見えるから。

④あなたの地域で日本一にしたいものはなんですか。その理由も書きましょう。

いちじく大福購入額日本一
→ 二郎のいちじくが有名だから。

朝 NIE におけるワークシートは教師作成のものでもいいが、現在新聞各社からホームページ上でダウンロードできる場合が多いので、生徒の能力や目的、朝に使用できる時間の長さなどに応じて選択することもできる。

本校では今回は適当と思われる 1 社のワークシートを活用し、各担当が点検する方法を取った。(fig2)

生徒にとっては、時事の話題に触れる機会が多くなり、自分の住む地域について考えることや、修学旅行で東京に行く際の興味・関心の引き立てにも一役買った。これは、教育活動全体の中で NIE が有効に機能した例の一つと言えるだろう。

さて、二つ目の取り組みは記者講演会についてである。NIE 実践における留意事項にも「⑨記者派遣事業を必ず実施する」とあるように、NIE の中心となる取り組みの一つである。本校では、新聞記者による講演会の依頼を行うことになったが、この講演会を後期の生徒目標である「新聞の有用性を認識させる」とことと、学校方策の「従来から行われている教育活動の中に N I E を位置付けて効果的に活用する」ことに、どれだけ関連させられるかが課題であった。そこで、講演会のテーマを「進路」に設定し、実施学年を 3 年生とした。折しも、兵庫県は学区再編の初年度であり、新しい受験制度への関心は生徒・保護者ともに高かった。そのため、進路学習に新聞を活用できれば、教育活動の中で、新聞の有用性を認識しやすいのではないかと考えた。

3 年生では、日頃のホームルームでも、進路に関する新聞記事を数多く紹介した。やはり、図などを用いて分かりやすくまとめているので、生徒や保護者に好評であった。(fig.3)

fig. 3



そのような取り組みを続けている事実を新聞記者にも伝えた上で、進路に関する講演会を行ってもらい、進路学習として効果的かつ、新聞の魅力を伝えられる講演会となった。

当該学年の生徒は、その後も自分たちで新聞から情報収集する習慣がついていき、志望校の倍率などを各自で確認することなどは半分、当たり前になっていた。

4. おわりに

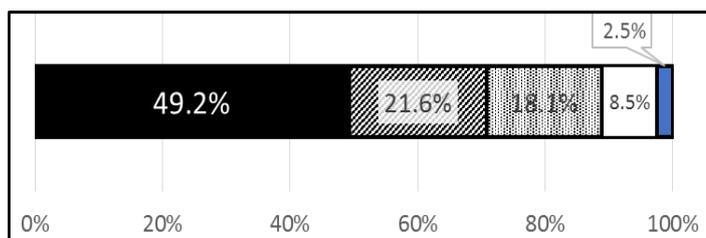
最後に、実践結果の目安を捉える一つの手段としてアンケートを実施した。

まずは、NIE と関係なく従来から本校で行われてきた生活アンケートである。fig.4 が昨年度の結果で、fig.5 が今年度の3年生の結果

である。このアンケート結果では、「②新聞を読む」の項目が去年の 13.0%から 21.6%に向上しているの、やはり進路学習で新聞を活用した効果は大きいと思われる。

また、本年度は生徒の新聞に対する実感を把握するために fig.6 のようなアンケートも実施した。このようなアンケートを継続して行い、経年変化を観察することが、NIE の達成状況を把握する一つの指標となるだろう。

以上のように、単発的な取り組みではなく中学校生活 3 年間の教育活動を見越した中に NIE を位置付けることによって、生徒自身が自らの成長を実感する場面を多く設定でき、教師も生徒の成長を通して取り組みの分析を、より効果的に行えると考えられる。つまり、実践指定校としての期間が終わった後も、有効な取り組みは可能な限り継続し、教育活動内で新聞活用されることが当然となるような、NIE の良い循環を作り続けていくことが望ましいとして今回の報告とする。



あなたは将来、自分の人生の中で新聞を活用したいと思いますか。

- ①十分に活用したい。(33.6%)
- ②どちらかという活用したい。(47.7%)
- ③どちらかという活用したくない。(16.8%)
- ④まったく活用したくない。(1.9%)

↑ fig. 5 「2014 年度アンケート」

↓ fig. 4 「2013 年度アンケート」

↑ fig. 6

